

SGD 演習レポート FD 研修会

2018年3月14日（水）に、京都大学薬学研究科の教員向けのFD研修会が行われました。その研修会に、高等教育研究開発推進センターから2名の教員（松下佳代教授、斎藤有吾特定助教）が講師として参加しました。

FD研修の目的：SGD演習の全学科での開講に先駆けて

薬学部では、初年次生向けの科目として薬学研究SGD（Small Group Discussion）演習という科目が開講されています。これまで一部の学科で開講されてきたものですが、今年度からその内容を刷新した上で、全学科で開講することになりました。

この演習科目の目的として、研究者・医療従事者を目指す学生としてのコミュニケーション技術の獲得、論理的思考力の醸成、ディベート能力・技術の獲得、自学自習の仕方、時間外学習の訓練、グループワークの体験などが強調されています。そのため、薬学研究SGD演習では、学生が主体となる少人数のグループワークによって、上記のスキルや能力の育成を目的としたさまざまな課題に取り組みます。当研修会は、それに関して教員間でコンセンサスを得るとともに、かつ高等教育、特に教育方法学の専門家のアドバイスを受けることを目的に開催されました。

FD研修の内容

まず、薬学研究科 高須清誠教授より、薬学部・薬学研究科が取り組むべきミッションが解説されました。そのために、カリキュラム改革、特にアクティブラーニングの導入、ルーブリックの活用の必要性が述べられました。加えて、SGDの内容や日程、担当などが簡潔に解説されました。

次に、高等教育研究開発推進センター松下佳代教授より、「アクティブラーニング・少人数教育の方法」と題して、講演が行われました。まず、アクティブラ



ーニング普及や旺盛の背景が解説されました。その際、アクティブラーニングが、学生が活発に見えるだけで深く考えていない状態、すなわち、「活動あって学びなし」にならないように留意すべきであると強調されました。次に、さまざまなアクティブラーニングの方法が紹介され、その中でも特に、グループ学習の技法に関して詳しく紹介されました。さらに、京都大学における複数のアクティブラーニングの事例が紹介されました。



続いて、同センター 斎藤有吾特定助教より、アクティブラーニングの、特にグループワークにおける成功事例と失敗事例から得られる示唆について講演がありました。グループワークの失敗事例では、グループワークへの個人の貢献度をどのように評価したらよいのか、それに関連してグループワークにおいては目立たないが役割をしっかりと果たしている学生をどう評価すべきか、といったことがよく問題になることが示されました。また、2つの成功事例から、目標に合わせたアクティブラーニングとそれに整合的である評価や、どのような学生も積極的に関わるようなアクティブラーニングのデザインが重要であることが見出されました。



センター教員 2 名への質疑応答では、グループワークの際、メンバー構成の同質性と異質性をどのように考慮したら良いのか、これまでと異なる評価をすることへの懸念などが議論されました。

最後のセッションでは、薬学研究科山下富義教授、柿澤昌准教授、津田真弘講師、矢野義明講師より、SGD 演習で予定している具体的なアクティブラーニングが紹介されました。ワールドカフェ形式、ディベート、薬学研究科の研究室訪問とプレゼンテーションなど、多岐にわたるアクティブラーニングと、それぞれの学習目標が詳しく解説されました。いずれも魅力的で挑戦的なも



のであり、それぞれを担当される先生がたの熱意を感じ、センター教員 2 名もとても刺激を受けました。

今後に向けて

初年次におけるこれらの活動の経験は、学生のその後の学びと成長にどのような影響を与えるのでしょうか。また、教員自身の成長にどのようにつながるのでしょうか。高等教育研究開発推進センターでは、引き続き薬学部の先生方と連携しながら、授業見学等をさせていただきながら、必要なときにサポート等をしていく予定です。また、この実践が学生に与える影響を追って検討していきたいと思えます。

記事作成者：斎藤有吾

編集：長沼祥太郎

監修：高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代